

2022年度全国労働組合生産性中央討論集会

開会挨拶

全労生議長 松浦昭彦

コロナ禍の状況もよくなり、海外からの旅行客はもう増えて参りました。海外から来られたお客さんは、日本は大変物が安いということで、楽しみに来られているということでありますが、物が安くて賃金が高ければいいのですが、物は安いけど賃金も安いという状況から、やっぱり脱皮をしていかなければならない。これは一つの私達の大テーマだと思います。

また、生産性の向上を伴う形にしていくということ言えば多くの企業はまだまだ、旧来のビジネスモデルであったり、従来技術の中で精神論での生産性向上であったり、そこから企業も脱皮をしてもらわなければならない、と思っております。

本日は、特にこの非正規雇用の労働者、とはいえ、私の出身組織では非正規という言葉を使わないことになっていきますので、正社員以外の働き方、UA ゼンセンでは業種の特徴もあって、6割以上の組合員が正社員以外の働き方の皆さんです。一方、製造業や多くの業種業態では、いわゆる正社員とそれ以外の働き方の方々と、明確に仕事の区分がはっきりしている。それぞれの業種で特徴がある中で、労働組合としてこうした方々の適正な雇用条件を適用されるようにしていくのかということと同じ働く仲間として考えていかなければならないと思っております。これは社会問題としても、全ての働く人たちが適正に処遇され十分に生活ができる、そういう社会を目指していくべきなのだろうと思っております。

今日は濱口桂一郎・労働政策研究・研修機構研究所長の基調講演の後、桑原事務局長から問題提起とオリエンテーション、その後分散会での議論という予定になっています。幹事会の中でも、今回このテーマで行うにあたり、それぞれの産業別、組織組合の状況によって開きがあるよねという話をしました。そういう中で議論の難しさというものをずっとどうしようかということで議論をしてまいりました。

やはり大事なものは、それぞれの置かれている現状や違いというものをちゃんと理解することから始めなければならないということだろうというふうに思っています。大きな課題は共通のものとしながらも実態についてはそれぞれの違いというものをお互いに良く理解し、了解をした上で何かヒントを見つけそのような中央討論集会になれば、という思いで始めさせていただきます。